

語り合う文学教育

2011年2月

第9回大会 2011年3月5日(土)

午後1時～4時30分

☆午後1時00分～ 会員総会

活動報告と会計報告をします。次年度からの役員を選びます。

☆午後1時30分～ 第9回大会 全体会

◇実践報告「モチモチの木」近藤恵子さん(枚方)

久しぶりの近藤さんの実践です。近藤さん自身が斎藤隆介の作品の値打ちを再発見した、と言っておられます。楽しみです。

☆午後3時00分～ 分科会にわかれて、実践報告の学習会

◇低学年「わすれられないおくりもの」 鈴木啓史さん(奈良)

◇中学年「ごんぎつね」 庄司たづ子さん(尾鷲)

◇高学年「自分の脳を自分で育てる」 草分京子さん(松阪)

☆午後4時30分終了予定・5時から懇親会

懇親会は実費です。3500円ぐらいでしょう。

※機関誌『語り合う文学教育』第9号も刊行されます。藤原先生、伊藤隆司先生、守田先生の論文や、みなさんの実践報告がたっぷり載っています。こちらも楽しみに。

※会員のみなさんは、次年度会費2000円を当日納めてください。会員になろうかどうか迷っておられる方もぜひ連れて来てください。この大会は会員以外の方も自由に来ていただけます。その人たちからは、機関誌代として500円をいただきます。

**会場は、三重大学教育学部1階多目的ホールです。
たくさん集まって、10年目に向けてのスタートを切りましょう。**

1月は、奈良で「モチモチの木」と「サーカスのライオン」の教材研究、三重で「わらぐつの中の神様」の実践検討をしました。

奈良で検討した後で、一人読みと書き込みについて質問をいただきました。

兵庫のある市で講演があって、講師の方が次のように述べられたそうです。

- ①一人読みは、予め読みの視点をあたえて、それについて書き込んでいくものである。
- ②子どもの一人読みは、授業の中でどんどん好きに出させるのではなく、目を通しておいて、例えばねらいに迫る内容のものを選んで発表させ他の子どもたちの読みを深めさせることをめざしたり、また、あえて対立するものを選んでいくつか出させて子どもたちに葛藤を起こさせることをねらったりする。
- ③わたし（講師の先生）は、一人の子の書き込みをコピーして全員に配り、自分の読みと比べさせ考えを深めさせるという方法をとっている。
- ④一人読みの目的は、どの子もテーマにそって一定の自分の読みをもって臨めるようにするためのもので、授業についていけない子がそのことによっていなくなる。

ということでした。

ところが実際にその日に公開された授業は、子どもたちの一人読みの発表のみのようだったそうです。

この市では、国語に熱心な先生たちはみんな一人読みをさせているそうです。

さて、この質問を寄せてくださった方は、

「私の授業を見られた国語教育に熱心な先生は、そういったやり方を進めてくださりませぬ。私は、教師が向き合わせたいことに子どもを向き合わせ、意味を問うような授業をするので、それは、教師主導すぎる、子どもをなめている、とおっしゃいます。その批判は私の未熟さから、実践のつたなさからもきているのですが、どうも納得できません。」

と言っています。

授業の方法や進め方はもともと多様だし、それこそ教員の授業の権利なので、一人読み書き込み自体を批判する気はありません。わたしもやったことがあるし、会員のみなさんもしておられることでしょう。でも、ある方法を絶対だという発想にはちょっとついていけません。

もう一つ言いたいのは、教師主導で子どもをなめているという批判についてです。講師の方は、あらかじめ視点を与えるし、意見も教員が取捨選択して出させると言っているのだから、これも教師主導ですよ。

語り合う会は、作品は子どもたちの中に生まれるもので、それは教員の働きかけによってしか見えてこない、と結成の呼びかけで言っています。教員の役割は大切だと考えています。

文学作品の授業は、子どもたちが読書の時間に本を読んで感想を述べあっているのは違いますよね。子どもたちだけでは到達できない世界に導くことが大事だと思います。そのためには、作品の語りの虚構の仕組みに出合わせる必要があるのではないかと最近では考えています。

会員みなさんも、質問を寄せてくださった方にお答えください。

多分大会にも来てくれます。

三重の例会の後で、会員の池田さんが次のような手紙をくださいました。

拝啓

過日は、〈語り合う文学教育〉の会に参加させていただき有り難うございました。会のおり、藤原先生のお話が心に残りました。藤原先生は、

「雪がしんしんとふっています。」……で、おばあちゃん〔おばあさん〕の話が始まります。おばあさんは、「雪の音にちょっと耳を澄ましています。」

この世界がどう創られているかを知っていくことが大切です。

おばあさんは、雪をどう捉えてきたのでしょうか。おばあさんと雪は親しくつながっています。雪と親しくしていかないと暮らしていけないからです。

だから、わらぐつなんです。自然の恵みがわらです。わらは、自然からの贈り物です。

そのわらを最大限に活かさないといけません。向こうにあるものに合わせます。自然に合わせます。だから雪に合わせて、わらぐつ、雪げたがあるのです。

そうすると、神さまが出てきます。

おばあちゃんは、このようにして雪と生きてきたし、生きているのです、その視点を大切にしましょう。

と言われました。

わたしは、先生のお話を伺うなかで、特に、「わらは、自然からの贈り物です。そのわらを最大限に活かさないといけません。」というお言葉から、次のようなことを思い浮かべました。

今から18年前の話です。

ある日、わたしは、学級の子どもの曾ばあさんであるいねさん、「おいねさん」という85歳の被差別部落の女性に、わらぞうりの作り方を教えてもらいに行きました。

なぜそうしたのかというと、その人のわらぞうりは、もちろん手編みで、鼻緒も美しく布切れで色違いにして交互に、時には三色の布を巻いている（おいねさんは、〈みっこ鼻〉と呼んでいました）ものでした。なによりも、この人のわらぞうりは、履きやすく、長持ちする、と今でもわらぞうりを売っているお店の人から伺ったからです。

実際それは、おいねさんが9歳の時から見よう見まねで作り始め、18歳で嫁いでもからもずっと作り続けているのでした。そこには、その仕事しかできないという厳しい差別がありました。

その当時、どこの地区の家でもわらぞうりを作っていたのですから、わらぞうり10足と他の品物（お米、大豆、切り干しなど）と交換をするには、他の地区の家で作られたわらぞうりよりも、まずは丈夫で、しかも美しい物でなければ、なかなか物物交換はできませんでした。

わら1把からわらぞうりが3足できます。1日10足から15足ほど作っていたといえます。その労力はこの後の文章で分かるかと思えます。ちなみに、お米1升とわらぞうり8足と交換していました。

わたしがおいねさんからわらぞうり作りを教えてもらっていた当時、わらぞうりを置いている店に行くと、おいねさんのわらぞうりは、他のわらぞうりよりも100円も、また他の店では200円も、おいねさんのわらぞうりの数が少なくなるにつけ300円も高くなるのでした。あるお店の人は、

「うちは、450円で売っている。いねさんのやったら、いくらでもほしいね。」と言われるのでした。

おいねさんの作られたわらぞうりは、わらをやわらかく履きやすくするために、木槌で1000回近く叩くのでした。

木槌は、手で持つ木の部分が13cmほどで、槌の部分は直径が13cm、長さは16cmほどの円柱形の木槌で叩く作業をしていました。

わらの下の台として使われていた直径40cmほどの楕円球の半分の形をした石は、長い間をかけて木槌で叩かれ叩かれして、土の中に半分ほど沈んでいるとおいねさんか

ら伺いました。見てみると、確かにそう見えました。

「700打つといい具合になるわ。にいやん。」

と言われたので、わたしは木槌でわらを叩きました。わたしは、700を一回叩いただけで息切れしてしまうのでした。

叩いたわらは、3本ずつに分け、それを左手の平の上に置き、右手の平でもみ転がすようにして、わらぞうりの通し縄を編む。その通し縄に2本ずつのわらを波を打たせるようにして編んでいきます。

その後、わらを力強く引き絞ります。

引き絞った後、またわらを編んでいきます。3回ほど繰り返すと、ぞうりの形になってきます。そのつど、わらぞうりの上や下を押棒（おすり）で満遍なく引き延ばすように転がします。でこぼこが取れ平たくなります。

押棒（おすり）は、1尺ほどの長さの檜の棒でできています。真ん中が2cm5mmで両端が1cm5mmです。そのような真ん中がふくらんでいる棒です。手作りであり、しかも嫁いってから67年間使い続けている棒です。おいねさんの押棒は、真ん中がへこんでしまっている押棒でした。

縄は、擦棒（こすり）で擦ります。鼻緒を作る時も、擦棒（こすり）を使います。擦棒で擦ると、布を巻いた鼻緒は螺旋状に型が付き、きりりと締め付けられ、美しい滑らかな鼻緒ができあがります。また、三色の鼻緒が巻かれているのに、よく擦られてあるので、でこぼこがありません。そのため、擦れても足の甲にやさしいわらぞうりだったのです。

さてその擦棒は、朴（ほお）の木で作った10cm位のものでした。中が空洞になっていて、真っ二つにしてなかの溝を大きくします。蝶番い状にして紐で結び、かちかちさせながら縄を擦っていく。この擦棒も、67年間使い続けたものでした。擦棒は擦られ擦られて、つるつると光っていたのでした。

そしてこの擦棒も、おいねさんが独自で作られたものでした。

おいねさんは、わたしがわらぞうり作りをしている時、言いました。

「わしは作るとき、わらぞうりを履く人のことを考えとるよ。わらをやさしく編み、そして、紐を力をこめて引っ張るよ。ええわらぞうりやないと物物交換できやへんしな。兄ちゃんにそんなこというてもわからへんやろなあ。」

1日置きの3回目の作業とおいねさんとの話し合いの後、わらぞうり作りを終える時、おいねさんから、

「あんたの母ちゃん、今もいつもわらぞうり履いとると言うし、海女に行くときも滑りにくいようにわらぞうり履いとると言うから、このわらぞうり持っていきな。」

と話され、おいねさんが作られたわらぞうりを母に7足、わたしにも7足いただいたのでした。母は、長くそのわらぞうりを「しっかりしたわらぞうりやなあ」と言って履き続けていました。

もう一つ、男山さんが、

「以前、わたしの担任していた子どもが、『おみつさんは、お父さんがわらぐつを作るのを毎日見ていたから、形はどうであれ、わらぐつをしっかりと作ることができたんだ。』と言った言葉に、わたしは、父親の存在をあらためて捉えさせてもらったのでした。」

と話されていました。わたしは、その時、

「わたしも小学生のおり、魚屋をしていた母が、鰹を三枚におろして、皮をはぎ、刺身にする時、その均等な大きさといい、刺身の盛り付けといい、とても美しく見えました。それを何度も見ていたので、売り物の鰹こそ刺身にしませんでしたが、鰹を三枚におろして、皮をはぎ、刺身にすることはなんとかできたのでした。これは、わたしにとっては、母親の存在を強く感じたことでした。」

と的外れなことを話してしまいました。

もしあのおり、先生のお話を伺っていたら、おいねさんのことを頭に浮かべ、おいねさんが、わらを大事にされてわらぞうりを作っていることと繋げられたかもしれません。それほど先生のお話は、わたしの胸をうつものでした。とても、よい学びになりました。有り難うございました。

敬具

池田 雅治

2月4日

藤原 和好 先生

追記

わたしの拙い文章のうえ、中身についても取り違いをしているかとも思いますが、このような形でこれからも、藤原先生に「語り合う文学教育」の語り合う会で気づいたことを伝えさせてください。それは拙い文章ですが、わたし自身の学びとなっています。

これからも、どうぞよろしく申し上げます。

それともう一つ、いねさんは、もう亡くなられています。いねさんのお孫さんにも文として綴ったものを紹介することを了解してもらっています。そのため、〈いね〉と実名で書かせてもらっています。

〈いねさん〉の〈いね〉と〈わらぞうり〉の〈わら〉。

「わらぐつの中の神様」とは、またその世界が違いますが、〈わら〉を大切にすると

ころは似ています。そしてわたしは、おいねさんのわらざうり作りは、生きるためにあったのですが、おいねさんの差別に対する抵抗でもあったのではないかと思います。わたしは、おいねさんの作るわらざうりにも神様が宿っていたと思っています。

わたしは、先生のお話を伺ったことで、ますます、おいねさんのことを語りたくなりました。

本当に有り難うございました。

池田さん、とてもいいお話でした。「わらづつの中の神様」の世界はもちろん豊かになりました。また、それとは別にわたしたちの心に残るお話です。ありがとうございました。

◇語り合う文学教育の会会報◇ 文責・橋本博孝

連絡先 〒514-8507 三重県 津市 栗真町屋町1577

三重大学教育学部 国語科教育研究室（橋本博孝）

✉ hiro3614@edu.mie-u.ac.jp

☎059-231-9210